

# 「手紙」の妙味

音声版：<https://www.leeslee.com/20210731letterLYK.MP3>

7月29日に「手紙」のミニサロンが「女性チャレンジ応援拠点」でありました。手書きの手紙やはがきを出す習慣のある人ない人が一緒に「手紙」談議。わたしからはその愉しみと、仕事でも仕事以外でも思いがけない効用がありますよ、とエピソードを少しお伝えしました。参加者の方からは、「もっと詳しく、ぜひ！」という声があったので、せっかくですから、レターと録音にまとめることにしました。音声分と合わせ、みなさんの今後の何かのヒントになればさいわいです。リー・ヤマネ・清実

## 「手紙」の愉しみ、思いがけない効用

手書きの手紙・はがきの良さを挙げれば、5つありました。

その1. 季節を先取りする愉しみ！（なぜなら）季節の絵葉書を少し前に買うから

その2. モノを選ぶ愉しみ！（なぜなら）送る相手、季節に応じて手紙の種類、ペン類を選ぶことになるから

その3. 問題解決の糸口になった！（例えば）仕事相手の誤解を解いた

その4. 〈雲の上の人〉と交流できた！（例えば）本の著者と知的交流を続けた

その5. サプライズな展開がうまれた！（例えば）本の著者の家族から手紙をもらった

そして何より、手書きの手紙やはがきを書くという〈いとなみ〉、時間・「間」がいい。人との縁を育むそのこと自体が、豊か。お互いの暮らしを彩り、精神を少し豊かなものにしてくれる。どうぞお試しあれ！

## 仕事先だけど、仕事を超えて出した「手紙」

1997年に人の紹介で大企業のプロジェクトと仕事する機会に恵まれました。プロジェクトリーダーとサブリーダーお二人との出会いは、「マーヴィン・ミンスキー」を知るようになるなど、知の世界を拓いてもらった恩人ですが、初期の段階で「事件」がありました。

ある日サブリーダーの方が、「小回りの利く金型屋さんをご存知ありませんか？」。すぐに会社員時代に取引のあった小企業の社長を思い出し、声をかけ、つないだのです。後は双方でやってもらったわけですが、大企業と零細な総起業、カルチャーも商習慣も違い過ぎました、行き違いが生じてしまったのです。

この顛末は2つの音声にまとめています。昨年2020年の「ひと言ひとり言」に録音したものと直近7月31日の音声です。

<https://www.leeslee.com/00LYKvoice20201023.MP3>

<https://www.leeslee.com/20210731letterLYK.MP3>

仕事上のことですが、仕事を超えて「個」として手書きの手紙を出しました。そうしても通じるという読みが頭の隅にあった。たぶん、この暗黙の読みがミソだと思いますが、「手紙」を出すという判断は功を奏した。今も交流は続いているのですから、不思議なものです。

# 返信率 60%、続く交流、拓く知

本を読んで、新聞の記事を読んで、ラジオを聴いて、著者や筆者に共感、感銘して、その想いを相手に伝える。1996年から2019年12月までの間に10名の方に手紙・はがきを出しています。そして、返信が届いたのは6名の方。確率としては高い方ではないでしょうか。

返信の期待はなくてはなかったのです。そして実際メールで返信がありました。文面を残しているのも忘れていましたが、今回読み直してみても、我ながら、これなら返信したくなると感じたのでした。本を読み終えてすぐに出したはずで、熱い想いが文面に出ています。



初めて本の著者に手紙を出したのは1998年3月11日でした。これは手書きではありません。公私半々のニュアンスが出るように感じてのことです。仕事上のレターヘッドを使っていますので、メールアドレスが入っています。

『鉄は熱いうちに打て』。著者に感動を伝える時は、時間をおかず実行するのがいい。熱い想いが著者に通じ、1998年以来つい数年前まで交流は続きました。著者もご高齢、自分自身のこれなりの年令ですから、これもよし。

さて、返信をいただいた6名の方の内、長く交流が続いたのはお二人、中程度がお二人、1、2度がお二人。長く続いたお二人のもうお一人とは、こういうことがあるものかと驚く展開が待っていました。音声版も合わせて、この思いがけない物語をどうぞ。

# 3年後に想像もしなかった展開

2001年の年明けに読んだ本に、すごく納得し、共感して、すぐに絵はがきで感謝を伝えました。返信はまったく予想していませんでしたが、まもなく著者から太い万年筆で書かれたはがきが届いた。うれしい驚きです。

最初は差出人の名前にピンときませんでした。しばらくして、ハッと、慌てて封を切ると、著者の次男の方からでした。

これを出発点に、交流は2015年まで続き、2016年に出した便りには返信が来ませんでした。音声版で話したとおり、逝かれたことを知らなかった、2019年12月中旬にご家族の方から手紙が届くまでは。

著者にお目にかかったことはないし、もちろんご家族の方のことはまったく存知上げないのに、親しみのこもった温かいお手紙でした。著者の書き残していた文をとりまとめ、文集をつくったのでぜひわたしも受け取ってほしいと書いてありました。まさかこういうことが待っていようとは…。人生を彩る物語になりました。

